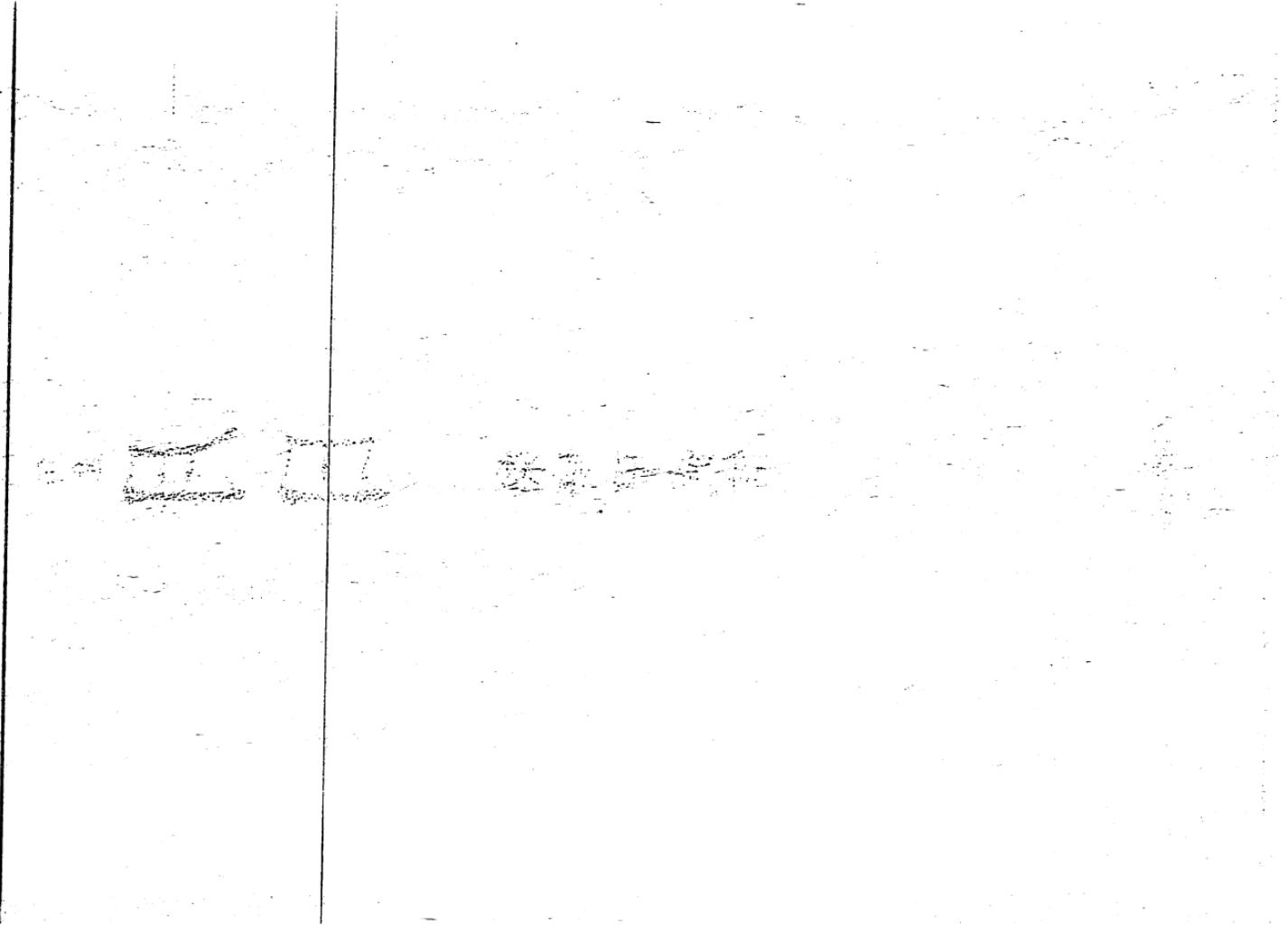


句集

月日

柴崎甲武信

本阿弥書店



睦みきし月日の燐と虹二重

鈴木榮子

句集 月日*目次

序 句 鈴木 榮子

尾 花 平成十三年

紫陽花 平成十四年

かたかご 平成十五年

紫木蓮 平成十六年

蕎麦の花 平成十七年

藻の花 平成十八年

石蕗の花 平成十九年

あとがき

装 帧 大友 洋

191 171 139 113 85 61 31 7

春燈叢書第一百七十輯

句集 月 日

柴崎

甲武信

尾
花

平成十三年

ふるさとの夜具の重さや嫁が君

母葬り暮雪の里に籠りけり

北面の湖上霽るるや義仲忌 もう聴けぬ母の唱歌や小正月

啓蟄や仏は見せぬほんの窪

戯画抜けし鳥獸參ずや涅槃絵図

伴 水
奏 底
は に
マ 都
ド の
ン あ
ナ ら
先 む
生 流
卒 し
業 離
す

囁や矜羯羅童子あつち向いてほい

大寺の廂の冥き抱卵期

鶴引くや李杜の国より伊玖磨の計

多羅葉の綸旨飛ばすや青嵐

楓 大 樹 根 本 札 所 の 滝 見 か な

早 苗 饗 や 上 り 框 に 僧 の 膳

夏草やその後兵隊ごつこせず

散骨の灰降りくるぞなめくぢり

喪の家の籠の蟹を放ちけり

真つ新なシーツの硬さ原爆忌

地
蔵
盆
路
傍
の
石
を
積
み
し
嵩

初
潮
や
糶
には
かけ
ぬ
神
饌
の
魚

紅差指は指輪差す指夢二の忌

睦言はふたことで足る虫の闇

まほろばや尾花の末の石舞台

みちのく
四句

色変へぬ恋の西行戻し松

入内雀騷ぎ判官鞣鞆へ

西行こけし芭蕉こけしや紅葉映え

大字に津の名浦の名雁の棹

葺山を這ひ上がりくる軍手かな

洗濯挟の色いろいや小鳥来る

お富士山うら高撥の砦なす

ふるさと回想
十句

坂がかる桜紅葉や小江戸みち

残菊や秘史に埋もれし宿場びと

東国は将門びいき蘆火守る

父の遺しシベリヤの匙雁渡し

一隅の墓群同姓石落の花

箕祭や軋み止まりし水車軸

スキー帽総領米屋継がざりし

蔵窓に読みし禁書やからつ風

風の掘りし隧道廢れぬ冬董
花を手櫛に梳けり朝市女
祖の掘りし隧道廢れぬ冬董

馬小屋と隣り合はせや干菜風呂

ふぐ裂くや潮目の変はる壇ノ浦

恋文横町落第横町クリスマス

煤逃げの第九合唱団へかな

紫陽花

平成十四年

お年玉源氏絵巻を三つ折に

初針や妻の珠玉の糸切歯

新卷の大江戸線を乗り継ぎ来

S 盤を守りし竹針供養かな

流し雛沖のひかりに立ち上がる

地虫出づ登り返しのさざえ堂

雁風呂を追ひ焚く小枝束ねけり

百年の巻きぐせに反り涅槃絵図

龍馬像仰ぎて飛ばす遍路笠

悼学長レガツタオール立てにけり

江戸小江戸繋ぎし水の温みける

蔵街のうらは寺町松尾鳥

川 越 夜 戰 石 碑 の 謾 か な

飛 花 落 花 篴 火 く ら き 夜 戰 寺

肘を置く駅の木柵花疲れ
雲低き鯖街道や水菜粥

着流しの助六役者蒸し穴子

歎歟と鳴き老鶯日月忘じけり

父の日の机辺灰叩き蠅叩き

星濡るる夜は紫陽花の数ふやす

水

郷

の

軒

の

深

さ

や

藻

刈

棹

水郷

八句

郷

に

入

れ

ば

郷

の

舟

歌

網

代

笠

鶴
鳴
く
や
河
童
伝
授
の
塗
り
薬

俠
客
も
遊
女
も
单
衣
さ
つ
ぱ
舟

仮 飯 を 蹤 散 ら し て を り 羽 抜 鳥

鯉 に 泥 吐 か せ て を り ぬ 三 尺 寢

舟虫も哭けよと船頭小唄かな

水無月や杜に祀りし藁の鯉

ここよりはアルプスの道かたつむり

姥捨の駅天に据う青棚田

攘夷開国両論併記落し文

乙女らの手のひらほどの水着かな

夜汽車の灯白々過ぎし切子かな

初潮や島の教會畳敷

鯉釣るやひかりまみれの糸の先

鯉釣の父と分けたる煙草の火

鰯飛んで真砂女の海の恙無し

蔵街の朝霧を堰く卯建かな

音を糺す耳無し芳一星月夜

下闋
九句

阿弥陀寺の名残りの塚やつづれさせ

われからや七盛塚は都向き
われからや七盛塚は都向き
月の座や文は西行武は東行

源 西
平 方
の へ
千 い
戈 ざ
の よ
浦 ふ
や 月
石 や
た 壇
た ノ
き 浦

雀入水し蛤となる壇ノ浦

師の句碑は公達烏帽子鶲囁す

乃木さんの棗ケリキや秋風裡

喪返しに遺作の新米届きけり

妻留守の一ト夜を妻の菊枕
卷狩の野に日矢束ね神の旅

藍壺の藍深眠る霜夜かな

言ひ初めて言ひそびれたる息白し

父の忌に間なき母の忌石蕗の花

雪折のつき裂く闇の硬さかな

冬麗や銀紙折りの剣岳

東馬西舟屏風絵果つや壇ノ浦

かたかご

平成十五年

詰襟の小沢征爾や初稽古

かたかごや日翳り早き水車小屋

立
ち
居
す
る
影
美
し
や
春
日
桶

立籬の書架に古ぶは遠流めく

悼 小林廣芝さん

鳥雲に壁に古びしベレー帽

復刻の大江戸古地図地虫出づ

か
ら
拭
き
の
雑
巾
白
し
涅
槃
寺

悼
鈴木真砂女さん

真
砂
女
な
き
安
房
の
海
山
百
千
鳥

石庭の籌目乱し鳥の恋

貼り紙禁ずてふ張り紙万愚節

風 船 壳 街 角 円 く 曲 り け り

花 粉 症 シ ラ ノ は 鼻 を 持 て 余 し

荷風忌や質屋流れの銀時計

先帝祭海より平家太鼓かな

漆 黒 の 木
の 艶 や 先 帝
木 番 祭

先 帝 祭 一 門 羽 織 る 揚 羽 紋

明易や朱を一刷毛に槍穂高

梁打や分水嶺に雲騒ぎ

長梅雨の鎧深めけり 傘雨句碑

マリリン・モンロー忌とは知らず髪洗ふ

地 球 儀 の 一 本 足 鑄 ぶ 原 爆 忌

生 き 死 の 胸 算 用 や 西 鶴 忌

生 姜 市 東 京 タ ワ 一 束 ね け り

ク ロ サ ワ の 録 画 と り る る 夜 長 か な

十六夜や松韻わたる大内山

秋果盛らむガレの伊万里絵写し皿

恋 幼な道草に茱萸摘みしこと

わが誕生記念樹渋柿なり渋かりし

新米の香を切り量る一斗枡

蔵座敷夜つ
ひて灯し夷講

小春日や喪服似合ひし原節子

民家園榾火守ること公務とす

鮫
鰯 の 碓
刑 あ と の 五 寸
釘

雪
雲 や 宿 場 の 荷 駄 の 晒 し 葛

猪垣を結ひし配所や院の庄

龍馬忌や時雨華やぐ八坂の塔

船 中 八 策 起 草 の 灘 や 冬 怒 濤

磨 き つ つ 吹 く 金 管 や 社 会 鍋

霜 烧 の 手 に 覚 え た る ハ リ モ ニ カ

男 子 厨 房 に 入 り 大 根 卸 し け り

釘一本打つて終りぬ年用意

紫木蓮

平成十六年

白朮火の上がる下がると別れけり

柝に入るる間の鷹揚や初芝居

万太郎の師系のゆくへ粥柱

吹かれきて福藁つかむ雀かな

野を焼いて陰陽石を顯にす

獺祭横目に艇庫開きけり

路地越しに籬の向き合ふ佃島

ふるさとや芹摘む母に妻の蹤き

虎杖の芽の天麩羅や古墳守

悼
三枝八郎さん

もう聞けぬ子恋の詩やつくしんば

死なざりし一兵の地や青き踏む

真砂女忌や満を持し咲く紫木蓮

亀鳴くや油光りの油壳り

魚島に鳥群れ戦艦大和の忌

リラ冷やパピルスの絵の壺売り女

行く春や路考結びの竹人形

竹籠の母の編みぐせ山櫻桃の実

乾拭きの上り框や蟹籠

木
鶴
に
な
れ
ず
仕
舞
や
羽
拔
鶴

鮎
鷹
や
お
台
場
ジ
ヤ
ン
グ
ル
ジ
ム
の
ビ
ル

スペイン 四句

尻 餅 の サ ン チ ョ の 丘 や 烏 麦

イスラムのカソリックのと道をしへ

炎天の峠アフリカ杳か見す

夏至の夜の僧院囲む鉄鎖かな

夜の秋や音なき汐の壇ノ浦
流燈や御座船いまも浦の底

八月や 団地の森の空戦碑

はらからを数珠がつなぎぬ地蔵盆

宗祇忌の郡上に一夜泊りかな

北を指す例幣使街道稻の花

隱
沼 の 日 溜
り 菱 舟 溜
り か
な

踊
る 輪 に 北 辰 傾 ぐ 羽 後 路 か
な

西馬音内盆踊
三句

竜田姫化粧ふ端縫の彩借りて

西馬音内字裏町の虫しぐれ

貝 割 菜 育 む 峠 の 星 明 か り

一 脚 の 椅 子 に あ づ け し 秋 思 か な

不揃ひの黄塗りの箸や茸汁
洛北や日照雨の磨く新松子

汝
の
胸
の
高
さ
の
林
檎
一
つ
挽
ぐ

秋
冷
や
夕
日
の
遊
ぶ
石
舞
台

天 津 風 羽 き し き し と 鶴 来 る

鶴
凍 つ る 一 声 天 へ 吐 き て よ
り

悼 成瀬櫻桃子先生 三句

賜
り
し
作
句
の
素
心
冬
銀
河

凍
蝶
に
天
日
移
ろ
ひ
や
す
き
か
な

靴替へて出直す小春日和かな

水鳥の吹き溜りなる湖尻かな

火の山を野末に据ゑて冬ざるる
鷹高く掲げ鷹丘口上す

大は小を兼ねる雪沓借りにけり

第九条重き大年第九聴く

蕎麦の花

平成十七年

鶴の瀬汲む若水桶や若狭びと

繭玉や樂屋雀の出入口

寒紅をひくや夜叉の手弥勒の手

かまくらの童女の眉の雫かな

横手
二句

千の灯の千の願ひやこかまくら

仕舞屋へ二月礼者や女坂

富士絹の裏地ほつれし小町の忌

モナリザのうしろの景のおぼろかな

能登一国俎上に載せし海市かな

京都 四句

水煙に日の残りたり余花の寺

鳥語銳き糺の森や祭あと

車争ひはこの辻と道をしへ

哲 学 の 道 着 流 し の 水 を 打 つ

蟻 蠻 や 一 艂 艤 を 陸 に 据 ゑ

横須賀

水底は燎原の火ぞ鶴の潜く

と胸衝く知覧の遺書や螢の夜

か
る
の
子
の
潜
く
水
輪
と
浮
く
水
輪

釘
軋
む
小
屋
の
板
戸
や
山
開

雲海の切れ目に光る昨夜の小屋

滴りが最後の水場啜りけり

ケルン 積む水惑星の欠片つむ

雀斑と亜麻色の髪巴里祭

踊の輪抜けし項の行方かな

色鳥や一步一景湖めぐる

捨て畑や日を惜しみ咲く蕎麦の花

判じ読む虫塚の句碑虫時雨

名

も 知

らぬ

小鳥

放てり

口力

岬

ボルトガル

六句

鶲

の 告

ぐる

王妃

の 秘話

蜜語

夕 弥 撒 の 扉 の 軋 み 秋 旱

冷 ま じ や 聖 堂 に 踏 む 棺 の 数

霧まとふ墨染めの衣やファードの歌手

ボジヨレー・ヌーボー口切る銀のナイフかな

山國や日照雨の磨く檀の実

棒道の北限はここ霧川原

川中島

兎追ひしかの山指せり二階より

貫之の紅葉辰之の黄葉かな

北斎のアトリエ小屋や虫名残

一茶忌や北信五岳の曇りぐせ

いぶせきはこきりこ唄や干菜汁

狐火や川越夜舟寄りし河岸

冬帽子傾げギヤバン来クーパー來

熊撃ちしばかりの銃を預けらる

櫻 目
桃 鼻
子 な
忌 き
修 竹
す 人
即 形
ち や
冬 雪
籠 催

暗がりに潮の鳴らせる若布刈桶

聴き分くる五山の音色除夜の鐘

藻の花

平成十八年

祝「春燈」創刊六十周年

万 先 生 敦 先 生 睞 み 鯛

初 凪 や 一 気 仕 立 て の 真 砂 女 の 句

秩父嶺を軒に引き寄せ機初め

雪晴れや遠嶺曳き合ふ江戸小江戸

連山に主峰は一つ雪解晴

鬱上げて信濃十国雪解かな

旅
鞆
抱
へ
直
し
し
余
寒
か
な

獺
祭
や
鳶
に
分
け
置
く
余
り
雜
魚

薄氷に搦め捕られし昼の星

切り岸へ白濤の秀や利休の忌

蕉翁の治めし水の温みけり

瀬に急かれ倒れては立ち雛流る

照
り
鸞
や
常
念
岳
を
雲
崩
れ

初
蝶
の
飛
び
込
む
合
せ
鏡
か
な

蓋 上
げ て
か の
世 を
覗 く
焼 栄
螺

て の ひ
ら を 母 港
と 発 し 紙 風
船

一吹きに百船生るるしやぼん玉

銃眼へものの芽迫る十重二十重

楠咲いて古刹の基壇ゆるぎなし

春窮の沙汰恙無し海坂藩

悼
肥田埜勝美先輩

飛花落花田毎に佇ちて野辺送り

八十八夜明けて野日和里日和

地 埃 も 雅 び や 賀 茂 の 競 ベ 馬

傘 雨 句 碑 圈 ひ て 祭 仕 度 か な

繡
毬
花
首
傾
げ
て
は
風
を
呼
び

安
曇
野
の
木
橋
土
橋
や
合
歛
の
花

オ フ ェ リ ア の 入 水 に 光 る 花 藻 か な

古 利 根 へ 放 ち し 鶴 や 草 筏

手漕ぎ櫓の野茨こぼさんばかりなり

父の遺しし徽のシベリヤ俘囚の衣

兜虫取つ組み合へば立ち上がる

ラムネ玉鳴らし渡りし河童橋

鈴
付
け
て
母
の
遺
し
し
登
山
杖

野
馬
追
の
一
騎
は
北
へ
落
ち
に
け
り

修し酌む餓鬼忌の谷中生姜かな

妻の退院

洗ひ髪手櫛にきらと妻癒ゆる

愈えし妻の軽きを抱かな草田男忌

炎昼や少年ひとり罐を蹴り

地
球
儀
の
血
痕
列
島
原
爆
忌

持
つ
て
け
と
烟
よ
り
西
瓜
抛
り
く
る

天宮のシユレツダリより鰯雲

宵闇や深井の面の妓に出逢ひ

辻
辻
は
恋
の
通
ひ
路
風
の
盆

は
し
な
く
も
遭
ら
ず
の
雨
や
風
の
盆

小夜更けて荒星和む風の盆

森漫と近江一国水澄めり

葛 薙 ぎ て 葛 城 山 を 曇 ら し む

く ら や み に 鹿 立 哨 す 東 大 寺

笹
飴
の
笹
剥
ぎ
き
れ
ず
鎌
鼬

水
底
に
鳩
の
秘
め
ご
と
謀
り
ご
と

松葉蟹解体マニキュア光らせて

北斎の波濤絡むや銀河の尾

残菊を括り峠の日集めけり

菜箸に聞く煮大根の機嫌かな

藁で磨く鉄瓶の底冬仕度

耀睨む原潛視て來し鮪の眼

小路 上る 下る 木履 事始め

祇園 裡に 小盆 伏せ顔 見世へ

野
袴
に
見
る
伊
達
模
様
年
の
市

大
川
の
水
底
供
養
鳩
潛
く

石蕗の花

平成十九年

武藏野の根のももの香雜煮椀

年酒客散じ揺蕩ふ夕ごころ

三 寒 の 空 へ 四 溫 の 觀 覧 車

凍 滝 の 裏 より 木 魂 戻 り け り

早瀬跳ぶ雪代山女眩しかり

麦踏んで秩父のふもと固めをり

名にし負ふ雪形にみし素影かな

祝
鈴木直充さん

祇王寺へ廻る殘んの雪明かり

摘草の業平塚へ及びけり

雁風呂や湯加減をきく羽後訛

飛
び
六
方
風
に
学
び
ぬ
雀
の
子

い
ぢ
め
つ
こ
い
ぢ
め
ら
れ
つ
こ
雀
の
子

ここはむかし耀歌の杜や百千鳥

風青し蕉翁治水の石樋かな

万 縁 の 裾 野 切 り 抜 き 湖 一 枚
火 山 碣 転 べ ば そ こ に 青 蜥 蟒

残照の雲居の富士や半夏生

妻の血を吸つたばかりの蚊を叩く

「吉祥」の金印得たる井戸浚

初恋やヨット操る手に手添へ

敦忌や遠嶺はなべて棚曇り

悼
石橋健君

被爆の身語らず逝けり広島忌

手花火のひとりは座敷わらしかな

いななきはかねやすあたり迎馬

汝が愛機整備せし如墓洗ふ

休暇果つシールの増えし旅鞄

正倉院囲み群盜めく野分

遠阿蘇の日和恃みや芋茎干す

羅針なき紺の天盤鷹渡る

紫昏とは鷹の渡りし岬の天

ワ イ シ ャ ツ の 襟 の 硬 さ や 石 路 日 和

桑 括 る 秩 父 の 風 を 抱 へ こ み

絵屏風の壇ノ浦より展きけり

顔見世やまねきはどれも北を向き

金

婚

の

ト

日

ひ

か

り

ぬ

初

曆

あとがき

美しき月日薔薇咲き薔薇咲きて　後藤夜半

今から五十年前、私どもの結婚祝としてご染筆いただいた祝婚句である。当時勤務先の大坂の職場句会（木曜会）に来られたあの温雅で端然たるお姿は今でも脳裡を離れない。因みに「諷詠」一二三号木曜会の欄に

暑氣中りして寝てをると人に聞く　後藤夜半
籐椅子に岩波版の虚子句集　柴崎育久
イヤリングはづし忘れて行水す　柴崎富子

の句が見える。“薔薇には棘がある”。長い人生山あり谷あり、喜怒哀樂に迷うなという教えと有難く拝受したのだった。

間もなく東京へ転勤してからは仕事に追われ、社内報に投句する程度で、句作から疎遠になってしまった。再度前向きに俳句を創ろうとなつたのは、妻富子の後に続いて昭和四十五年「春燈」に入会してからだつた。安住敦先生、成瀬櫻桃子先生の選を仰いでから今日の鈴木榮子主宰に至るまで作句を続けることが出来たのも、三師のご指導と句仲間の切磋琢磨、それに健康に恵まれたお陰であると深く感謝したい。

この第二句集名の「月日」は夜半師の祝婚句から頂いた。今日が金婚の日であり、喜寿の自祝を込めて上梓したいと願つたからである。子の無い夫婦がそれぞれ二句集を生み落すことが出来たことは、この世の幸せである。

鈴木榮子主宰から祝金婚の序句を、「春燈」同人で鳩寿を迎えたとする橋爪隆先輩からご丁重なる帶文を頂き、誠に光栄であり厚く感謝申し上げる。句稿の整理には「春燈」同人の小泉三枝氏にパソコンでお手伝

いをいただいた。また出版に際しては、同窓後輩の本阿弥書店の本阿弥秀雄社長と安田まどかさんにいろいろお手数をお掛けいたし、ここに厚く御礼申し上げる。

平成二十年五月二十三日

柴崎甲武信

著者略歴

柴崎 甲武信（しばさき・こぶし）

昭和6年5月25日 和光市白子に生れる。（本名：育久）

同 23年3月 埼玉県立川越中学校4年修了。在学中佐藤徳四郎指導により作句。

同 25年3月 東京都立第四高等学校（現・戸山高校）卒業

同 29年3月 東京大学法学部卒業

同 29年4月 日本石油㈱へ入社

職場句会（大阪）で後藤夜半の指導を受ける。

同 45年11月 「春燈」へ入会。安住敦の選を受け、引続き成瀬櫻桃子、鈴木榮子の選を受け、今日に至る。

同 61年 俳人協会会員

平成6年 春燈賞受賞

同 8年 燭下集入集

同 9年 草樹会会員

同 13年 第1句集『葵祭』刊

現住所 〒158-0097 東京都世田谷区用賀2-5-14

電話・FAX 03-3700-3895

句集 つきひ 春燈叢書第170輯

2008年5月23日 発行

定 價：本体2600円（税別）

著 者 柴崎甲武信

発行者 ほんあみ 本阿弥書店

東京都千代田区猿楽町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電 話 03-3294-7068（代） 振替 00100-5-164430

印 刷 熊谷印刷+クリエイティブダイトウ

製 本 プロケード